

「核なき未来への歩み」

「私たちの被爆体験を若者が継承することはできない。」

これは私が所属している青少年ピースボランティアでの被爆体験講話の際に被爆者の方が語っていたことだ。この言葉の真意は、原子爆弾を体験し、苦しんだ自分たちにしか伝えられないものがあるから、原子爆弾を体験していない人には自分たちの苦しみ・気持ちまですべて継承することはできないということであった。原子爆弾が投下されてから、78年が経過し、被爆者の平均年齢が84歳を超えた現在、平和活動に取り組んできた私にとって被爆者のあの発言はとても心に刺さるものがあった。確かに被爆者が体験したことや実態までは話せても、そこで感じた苦しみや怒りなどを継承することは不可能で、言葉の重みも異なる。

現在世界で12520発の核兵器があるとされている。長崎に投下されたたった1発の原爆によって、約74000人の命が奪われた(1945年12月までの推定)。核兵器が12520発も地球上に存在し、強大な威力であることを考えると、直ちに核兵器を廃絶すべきだと考え、今まで核廃絶のために活動してきた。

一方で、先日あるウクライナの方が「核兵器を保有していたらロシアに侵攻されなかった」と話していた。私は最初それが何を意味しているか分からなかったが、それが核抑止についての考えであると知り、その時初めて核抑止力という考えを知った。核抑止とは、簡潔に言うと核兵器の保有によって、核兵器の使用を躊躇する状況を作り出し、結果として核戦争が回避されるというものである。実際に長崎に原爆が投下されてから今までの間、国際的な対立は発生していて特に、アメリカとソ連の冷戦では核保有国同士のぶつかり合いで、核兵器が使用される危機はあったものの結果的には核戦争は回避されている。これは核兵器を保有していても、その使用は躊躇したから回避できたつまり核に核抑止があるという見方もできるのかもしれない。

しかし本当にそう言い切ることはできるだろうか。今まで核兵器が使用されなかったのは、その他の国の情勢や政治指導者の思惑など様々な要因が絡み合っていれば、奇跡的に使用されなかっただけであり、それを核抑止力という言葉でまとめるべきではないと私は考える。さらに核抑止が仮に存在するとしても、そこには様々なリスクがあり、機械の誤作動を起こし使用される可能性や、政治指導者が恣意的に使用する可能性など、核保有は危険を伴い、保有している限り使用しない可能性は絶対に0%になることはない。核兵器はたった1発の使用で、人を含む様々な生物の生命、文明、そして地球までも破壊することになる。そのような危険なものを地球に存在させておくメリットがどこにあるのだろうか。核兵器を廃絶させればこの危険性は0%になるにもかかわらず、本当にそのリスクを冒してまで、核兵器を保有するメリットはあるのだろうか。先にも述べた通り、私は「核抑止」という言葉をロシアのウクライナ侵攻をきっかけに知ることになったが、これは私が被爆三世として長崎県に生まれ育ち、小さいときから平和教育を受けてきたからこそ知らなかった言葉

だと考える。なぜなら、被爆者の方が体験したあの苦しみや涙を知っている人は核抑止という発想にならないからである。私にとって「核抑止」とは核保有国が核兵器を保有し続けるための言い訳にしか感じられない。そのような言い訳がまかり通っているのだろうか。

また、核保有国は核兵器を使用しても自国には影響がないと思っているのかもしれない。しかしながら、今もなお続いているロシアによるウクライナ侵攻で様々な国ないし地球に影響が出ているといえる。というのも、戦争により弾薬や燃料の大量消費、火災、破壊されたインフラの再建がなされ、そこには大量の温室効果ガスが排出されており、その量はウクライナの5倍の国内総生産を誇るオランダ1国分が排出する量に匹敵する。つまり、直接戦争の被害はなくても、1国の戦争により環境破壊や貧困・飢餓が発生し、地球に対して危険が及んでいる。これに加えて核兵器が使用されるとなると本当に地球が破壊しかねない。

被爆者たちの願いはただ1つ。核廃絶が1日でも早く実現されることである。核兵器は存在してはいけない、あれほど恐ろしいものはないと核兵器を体験した人がそう語っているのである。誰よりも信用できる言葉で、誰よりも言葉に重みがあると思うのは私だけだろうか。直接被爆者の気持ちを聞くことができる機会はそれほど残されていない。そのような中、今年の5月に行われたG7で首脳たちは被爆者証言を聞き、被爆者の体験した心情を含む証言を目の当たりにしたということであるが、首脳たち特に核保有国であるアメリカ・イギリス・フランスの首脳たちは何を感じただろうか。それでもなお核兵器を保有することを選択するならば、私たちは闇路を辿ることになるだろう。

私たち若者は、原爆の実相や平和の尊さを継承することはできても、体験した苦しみまでは継承することができない。しかし、私たちは微力かもしれないが、決して無力ではない。私たちが歩みを止めたとき、本当に地球は破壊してしまうかもしれない。「長崎を最後の被爆地に」するために被爆三世である私だからこそ継承できることもある。私たち若者は、ヒーローにはなれないのかもしれない。それでも、そのヒーローを支えるバイプレイヤーにはなれる。決してその傍観者とはなってはならない。